

学習院女子大学主催シンポジウム「<やさしい日本語>と多文化共生」 「多言語情報提供としての<やさしい日本語> —仙台市での実践から」

講演者：多文化社会コーディネーター 菊池 哲佳 氏

東日本大震災の際、仙台国際交流協会（現在の仙台観光国際協会）は外国人被災者向けに災害情報発信をする多言語支援センターを運営した。発災当日の2011年3月11日から、エフエム仙台と協働して災害関連情報を多言語で放送した。仙台国際交流協会では2005年から、災害時の外国人対応についての番組をエフエム仙台で月1回放送していたことなどもあり、双方で顔の見える関係があったため、震災時にも臨機応変に放送をすることができた。災害情報は<やさしい日本語>と英語・中国語・韓国語で放送した。

多言語支援センターでは、職員と留学生をはじめとするボランティアが協力して、相談対応や情報収集・翻訳を行った。<やさしい日本語>については、スタッフらが現地で書き換えをするとともに、弘前大学にも協力を仰いだ。それらの情報は、避難所などに掲示したほか、ウェブサイトやラジオで発信した。また、災害多言語支援センターでの電話対応でも活用した。

エフエム仙台で<やさしい日本語>で放送する際には、「これから<やさしい日本語>で流します」と紹介してから話をしてしたが、それを聞くと安心できた、という外国人からのコメントもあった。一方である地域では、津波の際の「高台に避難してください」という防災無線が、フィリピン人にほとんど通じていなかったということが新聞で報道された。災害時の<やさしい日本語>の必要性をあらためて認識する内容の記事であった。

東日本大震災では<やさしい日本語>の有効性があらためて確認されたことから、その後に「多言語防災ビデオ」（12言語）を制作する際、日本語版のナレーションは<やさしい日本語>の視点から検討を重ねた。具体的には、ナレーションをどこまで<やさしい日本語>に書き換えるべきかを制作に関わる人たちで議論し、検討した。例えば、家具の転倒を防止する「突っ張り棒」について、あまり意味を噛み砕きすぎるといざ店舗でその商品を購入する時にかえて店員に伝わらないのではないか、という問題がある。そこで、理解を助ける映像があることなども考慮し、「突っ張り棒」という用語はそのまま採用することとした。<やさしい日本語>への書き換えにおいては、書き換えのポイントなどを踏まえることは確かに重要ではあるが、それ以上に、情報の受け手を想像しながら情報のかたちを変えていくことが重要であり、また協働のプロセスに参加する人びととの対話が重要であるとコーディネーターとして考えている。

2016年11月に福島県沖を震源とする地震が発生した際、直後にエフエム仙台で津波への注意喚起を呼びかけることになったが、その場ですぐに<やさしい日本語>での呼びかけを任されたため、普段から<やさしい日本語>での表現を意識し、使用して慣れておく必要があると痛感した。また、行政内でもそのようなマインドを醸成し、日頃から文書などを作る際に「誰に伝えるか」「正しく意味が通じているか」を意識し、できることから実践していくことが重要だと思われる。

公益財団法人仙台観光国際協会 <http://int.sentia-sendai.jp/j/>

仙台市災害多言語支援センター <http://int.sentia-sendai.jp/saigai/>

エフエム仙台 防災ワンポイント情報 <http://www.datefm.co.jp/bousai/>

多言語防災ビデオ「地震！その時どうする」 <http://int.sentia-sendai.jp/j/life/bousai.html#a3>

(平成29年度作成)

問い合わせ先

「<やさしい日本語>と多文化共生」シンポジウム事務局

yananichi.symposium@gmail.com